

北海道新聞

平岸の歴史を訪ねて

〔開拓編〕

第24回、黒田清隆とケブロン

黒田清隆

大通り公園西10丁目に、大きな像が左右に二体、テレビ塔の方向を向いて立っています。向かって右が、「黒田清隆之像」、左が「ケブロン之像」です(図1)。北海道の開拓の最大の功労者ともいえる二人の経歴を見てみましょう。黒田清隆は、薩摩藩の下級武士出身で、戊辰戦争の際には参謀として活躍し、箱館戦争では旧幕府軍を下し、榎本武揚を降伏させました。薩摩人には古来より敗者を労わる伝統があります。黒田もその例にもれず、降伏した榎本武揚の助命嘆願のため、頭を丸めて説得にかけまわったというエピソードが残されています。その後、開拓使の次官となり北海道の開拓を取り仕切るようになります。黒田就任以前の開拓使は財政基盤が弱く、開拓事業も遅々として進まない状況にありましたが、黒田は薩摩閥の重鎮であるという中央政府との強力なパイプを生かし、強力に開拓事業を進めます。

黒田の人柄

このころの黒田の働きぶりが伝わるエピソードが平岸に残されています。西21番(平岸2条11丁目付近)に入植した松井新四郎が明治31年に「北海道毎日新聞」に語った話によりますと、『明治8年でしたか、黒田さんが開拓使の長官で自分で馬に乗ってどこへでも開墾地をお廻りになりました、今の長官さんのように下役を出して、貸下地の主と酒を飲んで開墾の方はどうでもよいというような訳でなく、ずんずん自分でお歩きになったものです。それで私の親父などは、大層勉強でたくさん開いたというので、おほめになった上、一等賞を頂戴しました。』と述べています。また、島松に入植し北海道ではじめて稲作に成功した中山久蔵の記録によれば、『(黒田長官が)来道された時、千歳見分に来るといので、人々が出迎えに出ていたが、長官は粗末な衣服を着て来られたため、誰にも分からない。この川にどんな魚がいるなどと聞いている男があるので、出迎人は、今日長官が来るはずだが、知りませんか、と問うとその男はおれが長官だと答えたので、一同はおそれ入ったことがある。』という話が残されています(札幌昔日譚)。以上のことから、黒田清隆は政府高官の地位にありながらも、決してえらぶらず、自ら率先して開拓の指導にあたっていたことがわかります。

ケブロンを引き抜く

黒田は10年間で1000万円(今の1000億円に相当)という大規模な予算を組んで開拓使十年計画を策定し、北海道の開拓に乗り出します。その基本構想を作ったのが、アメリカ人の開拓使顧問ホーレス・ケブロンでした。ケブロンについては、黒田自らが渡米し、引き抜きにあたっています。当時ケブロンは米連邦政府の農務長官であり、今の日本という農林水産大臣にも相当する地位に就いていました。アメリカの農務長官たるものが、



図1.「ケブロン之像」(左)と「黒田清隆之像」(右)

それを辞めてアジアの未開の小国の、しかも一島嶼の開拓の顧問になれというのは、失礼を通り越して滑稽ともいえます。野球に例えれば、ヤンキースの現役メジャーリーガーを国内の弱小地方リーグに引き抜こうとしているようなものでしょう。しかし当の本人だけは大真面目でケプロンを口説き、その熱情におされ、信じたことに引き抜きに成功します。ケプロンには年棒1万ドルというとうほもない報酬が支払われ、これとは別にケプロンが指名した専門家(地質・鉱山・農業・機械・測量など)も高給で雇われます(図2)。さらに彼らが買い入れた機材やそれを運ぶための運搬船(ケプロン丸、玄武丸)まで買い入れ、就航させました。

ケプロン計画と挫折

ケプロンの計画は誠に壮大なもので、要するに北海道をして、一躍欧米並みの水準に達せしめようというものでした。その仕事は多岐に渡り、教育、鉱業、工業、農業、酪農、水産業、交通整備など、開拓事業のほぼ全領域に関わっています。その中でも特に重要なものを以下に記載します。札幌農学校を開き、西洋文明の普及を進めます。北海道は寒く、イネが育たないため、麦をつくることを奨励し、洋式農法を広めます。また、平岸は土地がやせており、農作物の収穫が見込めないということで、リンゴの栽培を提唱しました。豊富な農業・水産資源を生かし、加工食品の輸出事業に取り組み、日本初の缶詰工場を作りました。さらには、交通網の未整備が開拓の障害となっていることを指摘し、札幌・室蘭間、森・函館間までの馬車道を整備します(室蘭・森間は航路)。この道は札幌本道と呼ばれ、現在の国道36号線となっています。ケプロン計画は、実施の段階になるとあまりにお金がかかるということで大幅に縮小されました。さらに、黒田の故郷の西郷隆盛が引き起こした反乱(西南戦争)により、新政府の財力が底をつくことで決定的に破たんしてしまいました。ケプロン計画は短期的には必ずしもうまくいきませんでした。彼らが撒いた種は、今の北海道を支える主要産業となって引き継がれています。

参考資料

札幌昔日譚、河野常吉、北海道郷土資料研究会
郷土誌ひらぎし、平岸小学校開校80周年記念祝賀協
街道をゆく15、北海道の諸道、司馬遼太郎

バックナンバーお届けいたします。ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

【編集後記】

〜ラジオの魅力〜

4月からFMアップルの「APPLE PARADE」にてこの連載のお話をしています。紙面の場合、スペースの都合などで、おもしろいエピソードでもカットしている場合が多々あるのですが、ラジオの場合は比較的自由に話せるため、連載とは一味違った切り口でお楽しみいただけたと思います。パーソナリティの森本洋子さんは、素人の私を上手にリードし、非常にわかりやすくお話を展開してくださいます。ラジオの方もぜひお聞きください。

執筆者：道新永田販売所営業主任 伴野卓磨

1977年室蘭市生まれ、登別市育ち。金沢大学理学部地球学科博士課程(古生物学専攻)を修了後、六花亭に入社。2011年より現職。

◇発行元◇

(有)北海道新聞永田販売所

〒062-0936

札幌市豊平区平岸6条13丁目7-18

TEL: 0120-128-348

FAX: 0120-128-358



図2. 左よりクラーク(農学校教師)、ケプロン、アンチセル(鉱山)、ワーフィールド(土木)、エルドリッジ(医師)

◆この連載は毎月1日・15日の北海道新聞朝刊に折り込みしています。次回折込日は7月1日の予定です。

6月15日は新聞休刊日のため休載いたします。

76.5MHz
FM Radio Station **APPLE**
FMアップル(76.5MHz)にて
「平岸の歴史を訪ねて」放送中!
今月は6月18日午前11時から